

米国帰りの浅沼喜惣次さん、佐々木英二さん

## 戦争中、米兵を十字架で埋葬



在米時代の浅沼喜惣次さん(右)、左は佐々木英二さん

右ページに掲載した1909年の写真のほかに、八丈島出身者の米国での写真は次々と見つかった。そのまま米国で生涯を終えた人もいれば、日米の開戦前に帰国し、島に帰ってきた人もいた。

戦時中の1945(昭和20)年2月16日、八丈島上空

で撃墜された米軍機のパイロットがパラシュートで降下して八重根の岩場(カマノトンプ)に激突し、即死する出来事があった。米国で生活した経験のある大賀郷・浅沼喜惣次さん、末吉・佐々木英二さんのふたりは、放置されていたパイロットの遺体を、ひそかに

近くの墓地に埋葬し、木製の十字架を立てた。

米国の国力を知っていた喜惣次さんは「あんな大國と戦争するとは」と、開戦を批判していたという。

05年、戦後60年目の風景シリーズを掲載していた東京新聞は「爆撃受けても情け失わず」のタイトルで、ふたりの勇気ある行動を紹介した。英二さんの息子の佐々木堅一郎さん(昨年逝去)はこの取材を受けた際に、「人に泣かされても、人は泣かさない。人情を大切に

にすることが私たち島民の信条。父も同じだったので」とコメントしている。

一般的に長男は家の後を継ぎ、島の外へは出て行かなかったが、喜惣次さんは長男でありながら向学心があり、英国へ渡っている。その後、米国でも学校に通える」と誘ってくれた叔父の菊池武さんの世話で渡米した。

英二さんは、硫黄島で現金を稼いでから渡米し、米国では新聞記者をしていたという。

## 「人に泣かされても、人は泣かさない、が島民の信条」

戦時中のふたりの勇気ある行為は、1988(昭和57)年11月28日発行の南海タイムス、シリウス「昭和史発掘」で、浅沼良次氏が発掘しました。写真。

1945(昭和20)年2月16日、八丈島に撃墜された米軍艦載機の飛行士がパラシュートで降下して八重根の岩場(カマノトンプ)に激突し、即死します。サイパン・テニアンが米軍に占

## 平和祈念の象徴

領され、硫黄島が玉砕した直後であり、次は八丈島が攻撃目標になるという緊迫感がみなぎっている時期でした。鬼畜米英として憎悪されていた敵国の飛行士の死体は、だれも見向く人もなく放置されていました。これを知った佐々木英二さんと浅沼喜惣次さんは、ひそかに近くの墓地に埋葬したのです。

終戦後、来島した占領軍の指揮官らは木の十字架を見て感激し、故・平井光吉さんに石の十字架を造ってもらいました。その数年後、飛行士の遺族が来島して遺骨を収集したため、石の十字架は撤去されました。

「米国で生活した経験がある二人は、戦争が始まると、八丈島の官憲からスパイ容疑を受けるといつらい立場にあった人たちである。それにもかかわらず敵国の兵士を埋葬したことは勇気ある行為であった」。

良次氏はこう書き記し、平井さんを含めて故人となった二人の功績を永久に残すよう町に提言しました。いま、十字架の行方はわからなくなりましたが、

大賀郷公会堂(都八丈支庁蔵)



としての力量を發揮した一面もあります。

1935(昭和10)年に着工した大賀郷村の講堂(後に公会堂)＝写真Ⅱの建設には米国に住む同村出身者たちから多額の寄付があったといえます。「父(喜惣次さん)の時代の人は行動力があり、志が高い人が多かったように、尊敬の念を持っていきます」と、今回たくさんの写真や雑誌を提供してくれた川崎市の千葉陽子さんは話しています。ちなみに、陽子さんは元八丈高校教諭の故・浅沼一郎さんの妹です。

人種の違いだけでなく、先祖代々の墓地に預かりの流人を埋葬してきた八丈島は、昔から排他性も差別もない島と評価されてきました。また、無人島開拓、米国やブラジルなど世界各国への海外移住により、パイオニア

八丈島民のブラジル開拓を特集した本紙新年号を読んで「小さな島といわれていますが、掘れば掘るほど奥深いですね」とは、八丈島を研究しているフランス人の民俗学者、ミシェル・ビュテルさんの感想です。(M)

